

平成 26 年度

事業所名 : グループホーム さくら

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370400426		
法人名	社会福祉法人憲幸会		
事業所名	グループホームさくら		
所在地	〒023-0003 岩手県奥州市水沢区佐倉河字十日市85		
自己評価作成日	平成 26 年 7 月 7 日	評価結果市町村受理日	平成26年9月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JigyosyoCd=0370400426-00&PrefCd=03&VersionCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会		
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号		
訪問調査日	平成 26年 7 月 16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員の職場定着が安定し、職員の資質向上も目に見えて向上した。良く努力し、准看護師資格を取得、今年度からは高看生として新たな出発をした職員がおり、良い刺激となっている。熟練の職員が常に利用者の側にいる環境は、グループホーム(以下GH)として私達が目指す理想により近くなったと自負できる。演題発表の機会も常に視野に入れ緊張感を持つような工夫もしている。当さくらは、複数疾病を抱えた利用者が多く、医療的な配慮が必要であり、長く利用されて超高齢化が著明ではあるが、家庭に近い環境で自然体での生活を提供していきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人「憲幸会」が運営するグループホームさくらは、法人変更に伴い事業所名も変更している。新しい体制の中、地域に密着した事業所となりたいとの施設長・管理者の意思のもと運営推進会議での検討を踏まえ避難訓練に地域住民の参加が得られるなど地域との関わりが進んできている。職員の業務等も新たなものとなっているが、これまでに培ってきた知識と頑張りで明るく利用者と接しており、心機一転新たな気構えが伝わってくる。また今年度からは職員の研修等も実施し利用者本位の支援を充実させたいとしている。今後に期待したい事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

事業所名 : グループホーム さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	日々の話し合い、毎月の合同会議、年4回のパーティ、運営推進会議等で確認し合っている。特に職員採用面接に現任職員が立会うことで理解が深まるようになった。	玄関には継承している理念が掲示されていて、訪問時に誰でも目にする事ができる。法人の変更に伴い今年度は全職員で検討し実践可能な理念を作成し、利用者支援に活かしたいと考えている。	理念は利用者サービスの質向上や職員の姿勢を表し日常の支援の振り返りとなるものでありたい。法人変更を機に利用者・家族、地域住民の理解が高まるよう、新たな理念を全職員参加で作成し実践される事を期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会への参加、地元振興会の会員になる、佐倉河地区文化祭への出品など、佐倉河地域の一員として参加し、交流している。さくらの湯は散歩コースである。	事業所周辺は民家が散居している為、日常的な交流には難があるが、散歩や回覧板の届け時に挨拶程度の交流を持っている。この他、公民館祭りに利用者作品の展示参加や事業所のイベント等で交流を図っている。	地域の一員として事業所の役割を全職員で話し、運営会議等で地域情報を得ながら子供会、老人会、婦人会等への声掛けや地域イベントへの職員協力等、積極的な行動参加が利用者の地域繋がりに結び付くよう期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当会の在宅介護支援センター職員が、年4回のパーティーや運営推進会議に協力し、民生委員の参加を得ている。認知症を具体的に理解できる機会となっている。保育園児を対象に遊びを通じて触れあいの機会を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2~3か月の合同会議を運営推進会議に広げ、第三者委員や民生委員、包括支援センター職員の参加により、実践状況を見ていただき、ご意見を頂いている。パーティーを運営推進会議に合わせているので、ご家族の真なご意見を頂戴できる。	昨年度は季節ごとのパーティーに合わせて開催された。今年度の1回目にはグループホームや認知症についての更なる理解を深められるようビデオやスライドで説明を行っている。今後は外部評価の報告も含め利用者の状況理解を得ながら、意見要望を支援に活かしたいとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者と計画作成担当者は、介護認定審査会委員である。当会の在宅介護支援センター活動を通じて市町村との情報交換も密である。運営推進会議には包括支援センター職員の参加がある。介護保険認定更新時は市町村職員が訪問調査するので、介護の実態を見ていただく良い機会となっている。	市の担当者とは運営会議、地域ケア会議等で同席の折に情報交換している。また利用者の要介護認定調査のために市町村の職員の訪問があり、その機会を通じて利用者や事業所の実態を伝えるなど連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	当会で最も嫌う身体拘束は、向精神薬の服用である。次に、認知症治療薬の無期限投与である。認知症治療薬に依存したいご家族がいないことは幸いである。玄関の施錠は、日中はしていない。	「身体拘束はしない」を宣言している。職員が日常の支援で不安を覚えたり自信が持てなかったりする場合の「気づきを活かした取組」や「思いこみ・馴合い支援」に付いて、研修計画に組み入れる予定である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待には、様々な形態がある。暴行や放置などに目が行きがちだが、わいせつ行為や財産詐取なども虐待である。特に家族によって金品を詐取されている場合は、分かっている手出しようがないのが現実である。管理者は常に様々な事例を示し、注意喚起に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は昨年、成年後見人の有資格者であるが、現在までご家族からの相談は無いものの、権利擁護事業を始めたいご家族への助言はしており制度の実行支援はしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書で説明し、さらに重要事項説明書で理解を深めてもらっている。入居時調査票への記入も家族にお願いし、想いの共有化を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要説明書で説明しているほかに毎月のお会計時、運営推進会議、パーティなど様々な場面で、意見要望を聞く機会を設けている。	会計時や受診時に家族が来所したときに意見等を聞く機会としているが長期入居者で家族遠方の利用者が多く、面会数も減少傾向にあり、意見要望が届きにくい現状にある。	利用者・家族と日常の生活情報をこまめに共有していく事により今まで見えなかったものや気付かなかった事が意見・要望として話し易くなるような信頼関係が構築されることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のミーティング、毎月の会議、復命書、企画書、決済書などで多くの意見や提案を聞く機会を設けている。ピラミッド型の組織にせず、横並びでどの職員にも発言の機会を設定している。当会独自のドキュメントと報告書により職員意見を発信する仕組みがある。	月1回の会議や朝のミーティング時に提案や要望をまとめ、即解決可能なものや現状不可能のものを施設長と管理者が判断し、意見を業務に活かし、提案されたものに付いては検討後回答している為、職員は活き活き働いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	複数回の人事考課により、客観的に自分を評価する機会をもうけ、職場の向上に努めている。就学、公的資格取得、介護認定審査員への協力など、法人として支援を惜しまない環境がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	様々な演題発表参加は、長期の計画に基づき、理事長、管理者、リーダーを交えての検討を重ねた結果の成果である。演題発表は、総合的な研修の場として、当会でもっとも重要な位置を占めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	家族介護教室、パーティ、夏祭りなどには必ず情報を発信し、同業者の参加を呼びかけ、交流の機会作りを積極的に行っている。法人のホームページにも、最新情報を掲載している。見学も正式な申し込みには応じており、交流の機会を作る仕組みがある。鳥取県や兵庫県の同業者との交流が続いていた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	最近では病院退院と同時に開始の方やもともとせの利用からの転居もあり、ご自宅訪問は無くなった。複数の情報を得て、ご本人との接触の機会を多くすることで、信頼関係の構築に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	当会の通所介護利用からの移行入所が多いので、初期の信頼関係は構築されている実感がある。しかし、主介護者が誰かによって、信頼関係なかなか築けない場合もある。(主介護者が妻の場合は思いの共有が難しい)		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用申し込みを頂いた際には、担当介護支援専門員や包括支援センター等への問い合わせを必ず行い、他の社会資源活用を深めている。安易にグループホーム利用でその場を切り抜くのではなく、長期支援を視野に入れ、最適な支援方を話し合っている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「そうですね、いいですね」と利用者の全てすることだけでなく、時には職員が利用者に反抗したり、利用者同士が小競り合いをしたり、誰かがとりなしたりという様々な精神活動があつてこそ、共に暮らす意義がある。そういう職員教育をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	年4回のパーティ、家族者介護教室、家族参観日、などを通して認知症介護は家族と共に築いていくものであること、私達介護者側には家族の支えが必要であることを伝えている。管理者はこれまでの家族との関わりも含めて「死なせかたのこつ」について発表を続けていた。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用開始に際し、ご家族に入居時調査票を記入していただき、その方固有の過去歴を大切にしている。利用期間が長期化するに伴い、記憶から消えたり身体的にその場に行けなくなるなど当初には予想できなかったことが出現している。	同級生や遠い親戚等の訪問があるが、訪問する方も高齢となり頻度は少なくなっている。以前は馴染みの床屋に行っていたが体力的に行けなくなり、新たに事業所に来てくれる床屋との馴染みの関係が築かれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	親密な関係だけが関わり合いではない。陰湿な感情の表出も重要な精神活動であることを職員が理解し、利用者同士の絆を深め合えるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者のリロケーションダメージを最小にできるように綿密な計画をたてて支援してきた。姥捨て支援ではなく、本人ご家族ともども関係を断ち切らない支援を目指している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用開始に際し、ご本人に必ず会い、お話を直接伺い、さらにご家族に入居時調査票を記入していただき、様々な角度から実態を把握している。しかし、主介護者がどなたかによって、思いが変わり支援に苦慮することがある。	直接的に思いを伝えられる利用者がいないことより、日常の会話や行動より、職員が利用者の思いや意向を思い図っている。今年度よりセンター方式を活用した利用者の思いの把握に取り組み始めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者開始に際し、ご本人に必ず会い、お話を直接伺い、さらにご家族に入居時調査票を記入していただき、様々な角度から実態を把握している。全ての当会サービスは、その方の過去歴の共有から始まる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月の定例会議で、お一人お一人の心身の状況を報告し合い、職員から意見を出し合って検討している		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の定例会議で、お一人お一人の心身の状況を報告し合い、職員から意見を出し合って検討している。毎月のご家族との面談等で情報の交換を行っている。	職員がセンター方式のアセスメントに記入し職員会議で検討しその内容をもとに介護支援専門員が介護計画を作成している。利用者の状態変化に伴う計画変更も随時対応し全職員が情報を共有し実践している。今後は家族を含んだサービス担当者会議の充実を図っていく予定である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の行動、言葉、そのことについての職員の関わり、結果をそれぞれの時系列で記入できる個別の支援記録を作成し活用している。これは、当会のオリジナル書式である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎日のミーティングを毎月の会議に反映させ、検討し、常に一人ひとりにあった柔軟なサービスを提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用開始の際にご家族から頂いた、入居時調査票を基本情報として、個別の暮らしを支える仕組みを作っている。田んぼを見たり、白鳥を見に行ったり、当会グループホームは地域資源なくては暮らせない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居に際し、かかりつけ医を変えてもらったことは無い。緊急時には、連携医療機関である奥州病院の協力をいただいている。受診時には、より適切な診療を受けられるよう支援している。	利用前からのかかりつけ医に通院している。受診は基本的には家族が同行しているが都合がつかない時には職員が同行し適切に医療をうけることができている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常的には、当会の看護師が関わっている。その他に、訪問介護ステーションと契約していた。折々に気づいたことを、医療機関受診時に反映する仕組みがある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関受診時には、当会から直近の健康状態情報を出している。本人は自分の状態を伝えることができず、ご家族も本人状態を把握していない。当会からの文書による情報が認知症高齢者の診療時には不可欠である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	いきなり重度化になるわけではないが、ご家族にはその過程が把握しかねるようだ。段階ごとの説明と、ご家族意向の把握を常に行い、時系列に記録し、職員ご家族ともに最新の状態を共有すよう努めている。	これまでに終末期等の対応を行ったことはないが、今後は終末期への対応が必要との認識のもと職員への研修を行っていく予定としている。また、本人や家族の意向や思いに答えられるよう調査等を等を行うなど、じっくりと取り組みたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	体温計、血圧計、パルスオキシメーター等を常備し、急変時のデータ採取、その後の連絡手順等トレーニングしている。グループホームでは、応急手当よりも専門スタッフへの正確かつ迅速な引渡しが大切である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の区長さんが中心となり、災害時には当会への支援を優先的にしようという動きになった。運営推進会議からの派生効果である。	消防署立ち会いのもと避難訓練は年に2回実施している。今年度の1回目の運営会議で住民の協力について話題とし協力要請したところ地域の方々5名程の参加協力を得て実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居前調査票によって、お一人おひとりが、何に傷つくのか、何を誇りにしているのかなどを把握するよう努め、入居後も検討を重ね、情報を職員皆で共有している。	呼称や声かけは利用者の尊厳に留意し親しみのあるものとしている。職員は利用者の人格を意識した対応になっているのか不安を持ちながら支援しており今後は全職員で話し合いを重ね不安を払拭出来るよう努力したいとしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人決定を尊重することを第一にしているが、認知症のため合わないことが多くある。そのため、ご家族との行き違いが発生し、事後処理に苦慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ドキッと報告書の検証によって、支援が職員の都合が優先されたか否かが分かる仕組みを作っている。さらに1ヶ月をまとめ、職員会議で全体の意見交換を行い、職員都合を優先してはいけない職場作りを目指している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居が長期化し、馴染みの理髪店さんなどへのお出かけもままならなくなっている。費用負担をしたくない意向の家族もいる。それでも年4回のパーティ前には全員が綺麗になるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居が長期化し、キッチンに立つこともままならなくなってきた。煮炊きの音や匂いからも食事が楽しめるようにしている。また、職員は必ず一緒に食卓を囲むことにより、家庭的な雰囲気大切にしている。	利用者の気分に合わせた支援を心掛けている。台所に立ち職員と一緒に食材の皮むきや野菜の下ごしらえ、切り方、味見等やりたい思いの気分を尊重している。献立は買物時や冷蔵庫の食材を見ながら、また利用者の希望を聞きながら職員がたてている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	調味料の使い過ぎによって、高血圧を招いていたので簡便な調味料の使用を禁止し、丁寧に出汁をとって調理している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の歯磨きやうがいを励行している。歯科通院支援も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	おむつ使用は原則行っていないが、利用長期化に伴い、夜間のみおむつ使用という方はいる。ポータブルトイレの持ち込みは認めていない。職員は、排泄はトイレで行うのが当たり前という意識を持ち、意欲的に取り組んでいる。	トイレでの排泄を基本とした支援が徹底されており排泄が自立している利用者が多い。いつまでも自立できるようにと日常生活の場面から歩行能力が低下しないような支援を行うなど排泄支援に意欲的に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況を把握し、食材にはきのこやヨーグルトを欠かさない、また、座らせっ放しにはしないなどしている。基本的に毎日の排便状況に応じて下剤の量を決めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的に、入浴は毎日、午後に行っている。促しと本人意向により実施しているが、気分によっては入りたくないといふ方もいる。	2～3日に1回程度の入浴ではあるが希望があればいつでも入浴できるようにしている。敢えて入浴剤は使用しないで対応している。就寝前などに希望があった場合も都度対応し良い睡眠が出来るよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居前調査票によって、入眠の状況や午睡の週間を把握している。眠剤を使わず、自然入眠できるよう支援しているし、ご家族の了解、協力も得られている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬情報を保管し、薬は一人ひとり写真付の薬ケースに保管している。頓服薬などは、管理者に電話を入れ、服薬支援の前の複数確認を励行している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居前調査票によって、生活歴の把握に努めている。買い物や誕生会の準備、パーティの際のご発声など、様々な役割をいただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご自身の意見を言える方は、そもそもグループホームにはあまりおられない。法人の庭がとて広く自然が一杯なので散策に連れだしたり、買い物のお手伝いをお願いしたりしている。	日課の散歩やベランダでの外気浴の他に食材の買物に職員と一緒に掛けている。また隣の事業所と合同で四季の移ろいを味わうドライブでお花見・日高火防祭・アイスクリーム屋・つつじ見物・商人市・紅葉狩り等利用者の希望に添った外出支援に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金をお金と認識できる方は、ほぼグループホーム適応外であるが、ご家族の理解とご協力のもとで本人所持している方もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人から電話を掛けることはないが、遠方に住むご家族が掛けてくることはある。その都度、電話に出ている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	対面式のキッチンからは、煮炊きの音や匂いが漂ってくる。風呂場は大きなガラス張りで開放感いっぱい、外光が入り、気持ちよく入浴できる。リビングは天井が高く広々としており、家具が居心地良くセッティングされている。	応接間の空間に、家族作品の写真や絵画があり、天井の高いリビングや廊下は広く、対面キッチン、テーブル、ソファの他に角の一部が畳敷で落ち着いた雰囲気である。涼感溢れる金魚の飾り物や金魚鉢が工夫を感じさせる。窓外からは自然が身近に感じられウッドデッキは利用者好みの場所となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自分専用の椅子があったり、物陰の置き畳で蜜やかに身を隠せる空間がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	お部屋づくりにまったく興味を持たないご家族がいるものの、何度も説明を重ね、居心地の良い空間作りをお願いしている。	居室は利用者の思い入れのある品々で、衣装箱、鏡台、テレビ、写真、飾り物、置き時計等が持ち込まれ、ベッドの位置も希望に合わせて安心・安全の居室として、居心地の良い環境になっている。今年、全居室にエアコンを配備し住みよい環境整備に努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	さくらは、認知症の方が生活する空間として良く工夫してある。色による識別効果や、高齢者の空間認知に配慮した造りにしてある。その結果、入居直後からトイレ位置が分かるなど、入居者にとって安全で安心できる環境となっている。		